

混乱期を生きて

神奈川県 植木延壽

一 生いたち

私が生まれたのは、満州国四平（現中国吉林省四平市）である。四平は以前は四平街と言われたが、日露戦争ロシア軍最後の陣地であり、日露間の講和条約細目協定が締結された歴史的な土地である。

地理的には中国東北部の南北に走る鉄道幹線の長春と瀋陽の中間点の位置にあり、そこからさらに東西に支線が走る鉄道の十字路として、今も重要な役割を果たしている。

父は明治三十七（一九〇四）年、軍属として満州に渡った。その後、四平の草分けの一人として、草創期から昭和二十一（一九四六）年終戦により引き揚げるまで、四十年余りをこの地で事業を続けていた。

父はいろいろな仕事に従事したのち、明治四十年（

ろに旅館「植半旅館」を開業。私が物心ついたころには、駅前で旅館、食堂、食料品店を経営していた。

宿泊客のなかには昭和三年五月から六月にかけて、南満州鉄道株式会社（満鉄）の招待で四十日余り南北満州と蒙古の一部を旅行された、與謝野寛、晶子夫妻もいる。

宿泊のときに詠まれた短歌を拝誦していると、私が生まれたころの四平の情景が浮かんでくる。

寝て聞くは蒙古の口の四平街

沙をしづむるむら雨の音（與謝野 寛）

ねじあやめ地平の線にいたらずて

其処さえはては白き砂山（與謝野昌子）

四平はその昔、元の太祖に与えられた土地であり、元、明の時代までは荒涼たる遊牧民の漂泊の生活が営まれていたと伝えられている。昭和の初期でも、まだその牧歌的雰囲気が残っていたのだ。このような土地で幼稚園、小学校を経て、昭和十四年四月には旅順中学校へ進学した。当時四平には中学校が無く、多くの級友は近隣の都市（新京、奉天など）の学校へ進学し

だが、父は敢えて遠くの旅順中学校を薦めた。その理由は、学校と寄宿舎の周辺、通学途上に繁華街や歓楽街がないことであつた。甥が、旅順工科学堂（旅順工科大学）に進学して勉強と野球を両立させていたのに、その弟は、通学途中に繁華街のある学校へ入学して、素行定まらなかつたのが念頭にあつたらしい。私は父の四十八歳のときの子である。兄たちは既に夭逝していたので、健康で真面目な人間に育てたいと願つていたに違いない。

旅順は海に面し、北に日露戦争の激戦地の山々が連なる、風光明媚な土地である。旧市街と新市街に分かれ、旧市街は商業地区。新市街はロシア人の造つた北歐風の建物が残る学園地区であつた。中学校と寄宿舎はこの地区にあり、勉学に適した環境であつた。「親の心子知らず」で、必ずしも期待に応えたとは言えないのだが。寄宿舎で初めて厳格な集団生活を体験し、学校では勉強はもちろんのこと、体力増強のためによく走らされた。親元でわがままに暮らしていた呑気者は、いきなり荒海に投げ出された稚魚のように戸惑つた。

しかし心身共に鍛えられ、虚弱体質も改善されて、何とか五年間を過ごすことができた。

昭和十八年四月、山本連合艦隊司令長官の戦死が報じられ、敗色が濃厚になってきた。文科系の徴兵猶予撤廃、高等学校文科の定員削減、理科の増員が閣議決定された時期でもある。多くの級友は理科系を志望したが、私は好きな道を進む方が良いと判断。不利を承知で旅順高等学校文科をめざした。

二 高校生活と勤労働員

昭和十九年四月、旅順高等学校文科に入学。第一外国語にドイツ語を選択して、ドイツ文化や文学に触れる日を夢見た。語学は第一、第二外国語併せて週十四五時間あつて、二年生以降勤労働員に明け暮れるまでかなり充実していた。高校生のシンボルは白線帽であつたが、我々が入学したときは既に関東局令の改正により白線帽は禁止になり、戦闘帽に決められていた。それに違反して退学処分を受けた者がいるほど、締め付けが厳しくなつていた。戦前の高校生が味わつた、自由を謳歌する姿は戦時色に包み込まれつつあつたが、

全寮制の寮生活は中学校に比べれば自由があった。中学校の寮生活は上下関係で律せられていたが、高等学校の寮生活は、個人の人格と人格がお互いに切磋琢磨し合う横関係のなかで人格形成が行われ、友情が生まれてきたように思う。わずか一年半にも満たない時期であったが、今もそのときの友情が保たれ先輩後輩の交流が続いているのも、この寮生活の貴重な遺産である。

学校の授業は順調に進むと思っていたが、戦時体制の強化で勤労働員が増えてきた。四月末には関東神宮造営の勤労働員が、また五月初旬から約二週間、土城子の海軍飛行場建設に動員された。七月には、三年生繰上げ卒業の送別会と出陣学徒壮行会が行われたあと、大連郊外の凌水屯で陸軍のコンクリート船舶用ドック造りに従事した。当時、軍の機密によりこの計画の目的は知らなかったが、戦後同窓会の手記により日本の食糧危機を救うため、満州からの物資運搬に供する造船計画であったと知る。近代戦争で、こんな船が通用すると考えていたのだろうか。我々はただ従うのみで

あった。戦争遂行のためとはいえ、炎天下でのドック造りの重労働は苛酷であった。その上副食は少なく、毎日のように薄味の冬瓜汁に握り飯か高粱飯で若い胃袋は満たされず、健康を害するものが多かった。戦後しばらく冬瓜を見るたびに当時のいやな思いがよぎり、食指は動かなかったほどである。私は結核反応検査が陽性に転化した直後のせいか、早い時期から体が衰弱して労働に堪えられなくなり、動員途中で帰宅療養した。労働逃れの感じがして後ろめたい気もしたが、お陰で健康を回復して学校へ戻ることができた。この凌水屯の勤労奉仕は九月中旬まで五十一日間続き、最後まで残ったのは六、七人だったことをみても、若者にとって苛酷な作業環境だったことが分かる。

勤労働員による授業時間の不足を補うため、学校は一年生の授業時間は一日六時間授業を八時間授業にして、不足を補う配慮をした。しかし昭和二十年四月、二年生になるや様子は一変。一月に徴兵検査を受けた級友たちは次々に入隊した。入隊することは死地に赴くことである。最後まで、「いやだ。入隊したくない」

と悩み抜いた級友を送るのはつらかった。また、昭和二年生まれで満十七歳に達した者は文科、理科共に全員徴兵検査を受けた。また先のことだと思っていたが、我が身にくるべきときが迫るのを感じた。

六月には入隊しない残りの文科五回生は、勤労働員で大連の満鉄中央試験所の各研究室に分散配置された。理科生は、実験助手的仕事を与えられたらしい。同宿の○君と私は、繊維研究室へ。麻を苛性ソーダの水溶液で所定時間煮詰め、水洗いして研究室の女子に渡す単純作業だ。バーナーに着火したあとは多少読書する時間もあり、今までの重労働とは違う気楽な動員生活なので喜んでいた。ところが、戦況は容易ならぬ事態に推移しつつあった。

八月六日、広島に原爆投下のニュースが伝わり、さらに八月八日、ソ連邦は日ソ中立条約を一方的に破棄して対日宣戦布告。八月九日にはソ満国境に侵攻してきた。これまで満州が戦場となることは予想していなかっただけに、突然のソ連軍の侵攻に緊張した。

三 国民兵としての召集

八月十二日の、同宿の○君と街に出かけようとしていた矢先、「大連駅に集合せよ」の電話連絡を下宿の奥さんから聞き、「日曜日になんだろう」と疑念を抱きながら○君と出向いた。集合場所には多くの人が集まっていたが、なかには下駄履きで来た者がいるほど情報が錯綜していた。召集令状は無く、だから指示を受けたかも覚えていないが、昭和二年生まれの者と、年配の予備役の人たちが突然召集を受けたのだった。まるで催眠術にかかったように、集団の中に吸い込まれていった。行き先は四平、西安、朝陽鎮に分かれたが、文科の五人は四平から南西にある炭坑の町、西安に向かった。すし詰めの貨車に揺られて、やっと西安に着。しかし、召集先の部隊は既にソ連軍と対戦のため移動した後で、少尉を長とする少人数の兵隊しか残っていなかった。しかも我々召集兵が来ることは知らず、武器はもちろん軍服など軍装品が無いのに驚いた。宿舎は国民学校校舎がわかれ、婦人会のボランテニアによる炊き出しで夕食をとる有様であった。関東軍がよほど慌てたのか、手違いだらうなど諸説飛び交

い、根こそぎ動員の真意を測りかねていた。そのとき、なんとなく不安な予感めいたものを感じていた。

八月十五日正午、重大放送があるというので校庭に設置されたラジオの前に集まった。玉音放送は雑音が多くて聞き取りにくかったが、皆と話し合いながら前後判断するうちに、どうやら戦争は終わったのだと理解した。聞き終わってこれから日本はどうなるのかという不安感と同時に、これで助かったという安ど感が脳裏をかすめた。国のために身を投げ出さねばと言いつつも、一方では死から逃避したい願望が心の中で葛藤し続けていたのも事実であるので、何かほっとした気持ちになったのを、今さらのように思い出す。その日は、なぜかだれも多くを語らなかつたように思う。終戦を悲しむ者、良かったと思う者、どちらにも鋭い視線が感じられたからであろう。

その夜、西安の炭鉱で暴動が起こった。我々の宿舎の周辺にも不穏な動きがあったらしい。時折、遠くで何か「ウオーツ」という海鳴りに似た音が聞こえて、不安な夜だった。情けないことに武器は無く、あるの

は銃剣術訓練用の木銃だけである。それを思い思いに手にして身構えていたが、何事も起こらず朝を迎えた。

翌日から、順次部隊が前線から戻って集結し始めた。現役兵は、黙々として固い表情のように見えた。それぞれの胸には複雑な思いが去来していたのだろう。師団長の独断により、召集兵は即日召集解除の命令が伝えられ、皆に明るさがよみがえってきた。我々は帰れるが、現役兵の今後を考えると気の毒でならない。少ない持ち物の中から、皆で何がしかを彼らに残すことにした。戦争が終わっても解き放たれない、彼らへのせめてもの気持ちを表したつもりであった。

余談になるが、後日四平組は軍装品を与えられた上、召集解除で帰るときにはいろいろ物資を持たされたと聞く。人生運不運あるが、さしずめ西安組は貧乏くじを引いたことになる。

幸にも、召集兵のなかに機関助手の経験者がいて、早速貨車を編成し大連へ向かうことになった。既に主要都市にソ連軍が進駐していたが、各駅の列車運行に必要な機能はまだ満鉄が維持していたので、出発でき

た。

途中四平で停車。幸いに出発まで時間があつたので駅前我が家に立ち寄り、今後のことを両親と相談。家族一緒の方が心強いので、四平に残ることを期待したが、父は「日本に引き揚げるときは、朝鮮經由が大連經由になるはずだから、先に大連に行け」と促した。長年異郷の地で暮らしてきた父の経験と動物的直感が働いたのであろうか。商売の性格上、従業員の多くは独身の女性であり、遠く親元を離れて働きに来ていた。父を信頼し、職を求めて海を渡ってきた彼女らの身を守り、無事に親元に送り届ける責任が重くのしかかっていたに違いない。その上、不測の事態によつて、息子が人質にとられるようなトラブルが発生する恐れ無しとは言えない。立ち寄つたときは、父の真意を確かめる時間的余裕はなかつたが、今にして思えば悩みの種を少しでも減らそうとしたのだろうか。危険の分散を意図したのだろうか。多くの友人たちが、危険を冒してまで親元へ帰つたことを考え合わせた。

両親と別れ、停車中の貨車に戻り、仲間と一緒に大

連へ向かう。その後、交通も文通も途絶え、このしばしの立ち話的会話が父と今生の別れにならうとは、予想できなかったのである。

四 鉄嶺での足止め

四平駅を出発。ソ連軍に拘束されることだけは避けたいので、空の貨車のように仕立てて各駅をすり抜けて行つたが、八月十九日、鉄嶺でソ連軍に停止を命じられてしまった。このときの事情は、黃文雄著「満州国の遺産」により最近初めて知つた。「ソ連軍司令官コワリヨフ大將は、山崎元幹満鉄総裁に満鉄社員の現職継続を指令したが、進駐ソ連兵と各地の暴民の略奪行為のせいで、八月十九日から二十三日までの間、列車運行が途絶えた」のだった。それとは知らず、不安のなかで長い間留め置かれて、まことに迷惑な話であつた。予定した五、六日ならば我慢できるが、予測がつかないときは心理的に長く感じて、忍耐に限界がくる。三日経つても出発の目途は立たず、腹は減るし、皆いらいらしてきた。食糧は文科生五人で軍足一杯の米があつたが、鍋も燃料も無いのでお手上げである。中

国人の売る「まんとう」で飢えを凌いだ。夕方、仲間
の五人と青天白日旗の翻る街を、やるせない気持ちで
当てもなくぶらつく。そのとき、大きな荷物を抱えて
いる三人の婦人に出会った。手分けして荷物を運びな
がらの話で、「主人は召集され、住まいが中国人街の近
くで不安になり、しばらくお寺に避難していたが、不
穏な事態が落ち着いたので自宅に戻る途中だっ
た」との話だった。女ばかりで心細いからの誘いに
甘えて、歓待にあずかった。久しぶりに畳の温かい感
触を味わいながら、ラジオから流れてくる「ボルガの
舟歌」を聞く。なじみ深い曲ではあるが、時代の変化
を感じた。窮屈で不潔な貨車の生活から解放され、手
足を伸ばしたこのときの喜びは忘れられない。

その後もさらに二、三日出発できない間、情報を氣
にしながら貨車を抜け出してはご馳走になり、入浴も
させてもらった。いつまでも出発できないのに痺れを
さらし、徒歩で大連へ向かった人たちが途中で暴徒の
餌食になったことを、後で聞いた。もう少しの我慢だ
ったのに、気の毒に思う。

八月二十四日、鉄嶺駅を出発。順調な走行を願って
いたが、夕方蘇家屯でソ連軍司令官の許可が下りずに、
停車させられた。夜中に八路軍らしきものが鐘を鳴ら
して喊声をあげ、民家を襲撃している情報が伝わって
きた。全員下車して、列車の陰でポケットに石を詰め
込んで身構えていたが、何事もなく治まった。

翌朝再び出発。途中、機関士はソ連兵に拳銃で威嚇
されながらも、大連へ貨車を運転し続けた。常に危険
と背中合わせで運転する機関士や、補佐する人の苦勞
に頭が下がる。

八月二十六日、やっと長い苦渋な貨車の旅を終えた。
危険を避けるため、大連駅から離れた所で下車。小崗
子を通り、軒並み青天白日旗がはためくなかを、満鉄
中央試験所の寮に立ち寄って街の様子を聞いた。予想
通り、ソ連兵の暴力沙汰や中国人の騒ぎが起こってい
ることを知り、暗い気持ちになる。動員中にO君と下
宿していた、清見町の知人宅にまず向かった。途中、
常磐橋停留所付近の商店では、うわさ通り暴徒の破壊
跡があり、破損したガラスを板張りで手当しているの

が目につく。電車が春日町を過ぎるころ、ソ連兵の拳銃の銃声を耳にした。白昼何が起きているのか訝りながら、不法地帯を行く思いで下宿先へ急いだ。

五 終戦後の大連

ソ連兵による暴行、略奪のうわさが近所に及んでくるにつれ、住宅区分ごとに自衛団を結成して自己防衛することになった。若者が交代で夜間警備するのだが、無防備で限界があった。敗戦で軍隊や警察の權威が失われ、住民の生命財産が保護されなくなった外地の生活は、惨めだった。財産の保全どころか、生命の危険にさらされながら日々暮らしていた。大連はまだしも、国境近くの町や開拓団からの逃避行は暴行略奪に遭い、悲惨であった。大連に逃れて来た婦女子は、暴行を避けるために髪を落とし、みんな男装姿であった。自衛団の役割は、ソ連兵に侵入された家から連絡があれば当番の青年たちが駆けつけ、その周囲を遠巻きに取り囲み、手にしたバケツやブリキ缶を棒でたたき、大声でわめき立てるのが精いっぱい抵抗であった。ソ連兵にしても多少後ろめたさがあるのか、早々に退散し

た。これに味をしめて、次第にゲーム感覚になつてきた。ところが相手もさるもの、次からは見張り役を置き始めた。それとは知らずいつも通りバケツをたたき、大声を出して追い出そうとした。すると暗闇から大男がむっくり現れ、「シトタコイ！（こらっ！）」と叫ぶやいなや、拳銃の銃口を向けてきた。我々は脱兎のごとく逃げたが、後ろから拳銃の音が夜空に響いた。逃げおおせたところで、お互いに顔を見合わせ「殺されると思った。肝を冷やしたなあ！」と、息をはずませ苦笑したものである。

九月に入つて、占領政策を悪用したかどによりヤマーノフ大連地区司令官が罷免され、次期司令官としてコズロフ中将が就任。布告を出して、「暴動をなす者は、民族の如何を問わず銃殺。繁華街の商店を開店し、夜九時までは明かりをとすように」と指令した。これにより、大連にも平和と治安の回復が期待された。しかし住宅地でのソ連兵狼狽のうわさは絶えなかつた。現に九月十八日の夜、わが下宿に五、六人のソ連兵が侵入して来た。覚えてたのロシア語でとりなしたが、

結局いろいろ物色された挙げ句、家主は時計、自転車、着物、金銭などを持ち去られてしまった。そのころ、大連経済専門学校の学生寮で、コンパをして気炎をあげていたのが学生蜂起と誤解されて、保安隊の襲撃を受けて犠牲者が出たことがあった。

司令官の布告で平和産業の復活、一般業務の開始を命じているが、現実には働く所は無く、日本人は売りに食いで生活していた。仕送りも無くなり、いつまでも居候では肩身が狭いので、○君と二人で近所の人から品物の委託を受け、それを売って何がしかの口銭を稼ぐことにした。多くの日本人は、街頭に立つことはプライドが邪魔してできない。その人たちに代わり、委託品を売る商売が成り立ったのである。

そのころ、清見町から中心街に近い薩摩温泉で、日本人が道端で店を出していた。場所を少し譲ってもらい、そこにゴザを敷き委託品を並べての露天商である。買い手はほとんどが中国人であった。生きるためとはいえ、はじめは屈辱感もあって恥ずかしかったが、それも毎日リヤカーを引いて通ううちに慣れてきた。あ

る日、品物の値下げをめぐり中国人の客と言ひ争いをしてしまった。その客が「不要（いらぬ）」と言って品物を投げつけてきた。日ごろの鬱憤が一気に爆発して、「なに！」と言うやいなや、○君がその客を殴ってしまった。客もとっさに傍らの花瓶で○君の頭を打ち返して、流血の惨事になったからたまらない。これを見聞きした群衆が二重三重に我々二人を取り囲んで、車道の真ん中で殴る蹴るの乱闘が繰り広げられた。そこに小柄な蒙古系のソ連兵二人が現れて、肩からかけたマンドリン（自動小銃）の銃口を大衆に振り向けた。その瞬間、あつという間に群衆は暴行をやめて蜘蛛の子を散らすように四散した。日本人がなぶり殺されても泣き寝入りするほかない、無秩序時代である。すんでのところで抹殺されるところを、○君と共に奇跡的に助けられた。そこに保安隊が駆けつけて来た。我々二人は交番へ連行されて、厳しい尋問を受けた。もちろん事情を知る証人などいない。保安隊にどれほどの権限があるのか分からぬが、処刑かブタ箱送りと覚悟した。幸いに、通訳は日本留学の経験があつて「学生

の気持ちには分かるが、時代が変わったので自重して行動するように！」と説諭され、取りなされてからくも無罪放免になった。何とも言えぬ屈辱感を味わったものの、平素は憎きソ連兵に助けられ、今また中国人通訳に取りなされて、「地獄に仏」の思いがしたのである。現場に戻ると、不思議なことに満人の鷹揚なところなのか、喧嘩の相手も民衆も冷静になっていた。親切な日本人女性に傷の手当を受け、荒れた心も癒されて、二人は腫れあがった顔と体の痛みに堪えながら、重い足どりで帰宅したのである。

やがて露天での商売の売上が減り、今後どうしたものか思案する日が続いた。そのころ、級友のH君は先輩の実家の「大力」という料理店の所有する店を借り、委託販売をしていた。その商売が好調であることから、合流させてもらった。A教授を含め、理科生二人、文科生三人合わせて六人の体制により、大連で一、二の繁華街、浪速町横の伊勢町を拠点に、委託販売を始めた。結果的には先輩のご両親のお世話になったが、発足後しばらくは大いに儲かった。

ソ連軍が大連に進駐して来た当初は、独ソ戦の終結により急遽ソ満国境へ転戦侵攻して来たため、兵隊の着ている軍服はぼろぼろで時計をする者は無く、略奪で調達していた。それも、二、三個得意げに腕につける者もいた。やがて治安も沈静化して、十月ごろからソ連軍の軍票が通貨として流通し始めるにつれ、ソ連兵は品物を軍票で買うようになった。ソ連兵がばらまいた軍票で、町は潤い活気がでてきた。この軍票は見るからに安っぽい色刷りで、不兌換の軍用券である。その後軍票は乱発され、価値も下がり、次第に物価も上昇したように思う。

委託販売の仲間に入ったころは、品物さえあればよく売れた。素人の学生が扱う多少瑕のあるウール生地や洋服、着物でさえもソ連兵は買ってくれたので、武家の商法ならぬ学生の商売でも成り立ったのである。「大力」には、ソ連軍の将校が寄宿していた。彼はなかなかのインテリで、ドイツ語が堪能であった。客寄せに効果のある看板の文句を彼に頼み、「ジョウシヨウ・イ・セルデイト(怒るほど安い)」なるユニークな

ロシア語の看板ができた。これが予想以上に効果てき面で、笑いながら入って来るほど客に大受けした。買う意思がなくても看板を見て店に入る客もあり、一時期大いに賑わった。

来客を通して、あるいは町で感じたのは

・ソ連将校のなかには母国語以外の外国語をかなり流暢に話す者がいたこと。

・国としてのソ連は好きになれなかったが、個人としては素朴で、親しみやすい愛すべき人間が多くいたこと。

・直属上司以外、敬礼しているのを見たことがないこと。

・酒が強いこと。四、五〇度のウオッカをストレートの一気飲みをすること。

ある日本人が挑戦してダウンしたが、よくよく観察するに彼らは一気に一杯飲んだ後食べ、しゃべり、水を飲んでいた。次の一気飲みまでの間隔が、日本人に比べ長い。日本人は一気飲みした後食べても水は飲まない。

・隊伍を組んで歌う軍歌は、二部か三部合唱になっている。美しいハーモニーが心地良かった。

ソ連兵の集団には、教養人もいれば、相変わらず女を求める者もありで、戦争は人間の本性を丸出しにし、悪魔が顔を出すのだろう。ある日、男の将校に抱えられた酔っ払いの女が店に入って来て「こんな古着をこんな値段で売るとはなにごとか！」と言って、ガラスに貼ってある例の看板をはがして破り捨てた。そのうえ、足でそれを踏みにじって出て行った。腸が煮えくり返って、思い切りぶん殴ってやりたい衝動に駆られたが、ぐっと堪えた。こんな惨めな思いまでして頭を下げ、商売する我が身が情けなかった。

昭和二十一年も半ば過ぎのころ、ソ連軍将兵の必需品の需要がある程度満たされてくるに従って、未経験の学生の商売は行き詰まってきた。売り上げが減って、家賃はおろか食事代にも窮してきた。米飯が玉蜀黍のパンに変わり、さらに高粱飯になった。その後、高粱のお粥が重湯に変わった。それでも、それほど悲壮感はなかったように思う。境遇を同じくする五人の仲間

と生活して、苦しい時期を共有。今思えば青臭い抽象論に過ぎなかったが、愛を語り人生を論じ、音楽に心を癒されていたからでもあろう。この時期に、今は亡き音楽好きのT君の影響で、数多くの交響曲、協奏曲、歌曲などを聴いてクラシック音楽の醍醐味を教えられた。また音楽の知識は今もこの範囲を出していないが、貴重な出会いであった。T君が友人から借りてきたレコードを繰り返し聴き、ドイツ歌曲やベートーベン第九「合唱曲」を覚えたのはこのころである。食べ物がないときには瞑目、寝転んでレコードを聴き、空腹をまぎらわしていたことなどが忘れ難い。あるとき、O君は寝転んで目を閉じたまま「アンダンテカントタビレ（チャイコフスキー）をかけてくれ」と注文。彼は、空腹より愛の悩みに堪えているのだった。今になれば懐かしい思い出である。

昭和二十一年十二月初め、大連から日本への第一引揚船の出港が始まった。引揚げの順位は、引揚対策協議会が貧困度によって決めるらしく、市の中心部にいる我々は遅くなるだろうと思っていた。しかし、「大

力」の奥さんが貧困学生たちを早く帰国させるようソ連軍将校に働きかけていたらしいが、正規の順番外があるのかないのか。何も知らされていないので、いつになるか不明だった。従って出発は文字通り突然で、「今日出発するから至急荷物をまとめよ」と指示があった。荷物は本ぐらいしかなかったので簡単だったが、急なことでは知人にも連絡できなかった。特に、語学の勉強に通っていたドイツ大使館の留守宅の娘さん（父親はソ連に連行されていた）に、お別れの挨拶もせず出発したことは、今も悔いが残っている。十二月末か翌一月ごろ、彼女は大使館の窓越しに港を眺めながら「貴方も近く帰国するのでしょうか？」と問われた。そのときは、まだ先のことだと思って「いつになるか分からぬ」と答えたのだが。その後間もなく突然の出発であり、気が咎めてならない。

昭和二十二年二月、大連埠頭から引揚船として配船された米軍上陸用舟艇に乗船。屈辱と苦渋の生活に別れを告げて、大連を出港した。

久しぶりに純白の銀飯とみそ汁に感激。船底の雑魚

寝も気にならず、はや日本へ帰ったような気分になった。年配者の多くは、敗戦の痛手を負い虚脱状態になって行動力がなく、何かにつけ若者が駆り出された。食事の配膳、船内清掃など分担した。特にトイレの汚れはひどく、目を覆いたくなるほどで苦勞した。敗戦によって日本人の心の荒廃はこれほどまで荒むものか。そのモラルの低下ぶりを嘆きつつも、若者はトイレの後始末に明け暮れた。上陸用提出書類の翻訳や雑用にも忙しく立ち回っているうちに、日本上陸の日が近づいてきた。

六 引揚げ後の生活

DDTの粉を頭からかけられ、佐世保に上陸。二日ほど留め置かれた後、各人目的地へ出発するのだが、両親が無事帰国しているのか分からない。予め決めていた両親と落ち合う第一の候補地は横浜（日吉）であったが、事務所の地図では焼け跡表示になっていた。次の目的地までは打ち合わせていないので、不安になる。思案しても解決しないので、ひとまず横浜へ行くことにした。父が昭和十九年甥に依頼して建てた家で

あり、訪ねるのは初めてである。土地感はなく、探すのにやっとだった。周囲は焼けていたが、幸い我が家は残っていたのでほっとする。訪ねてみると、母屋には全く知らない家族が入っているの、番地が違うのかと一瞬たじろいだ。すると奥から母は現れたが、やつれきった様子だった。聞けば、「お父さんは引揚げ後間もなく、昭和二十一年十一月二十一日にここで亡くなった」と泣きくずれた。その後聞いた引き揚げまでの四平での生活は、概ね次のとおりである。

昭和二十年八月、父と分かれたあと、八月十八日ソ連軍が四平に進駐。旅館は司令部として接收された。もちろん商売はできないが、両親と一部従業員は住むことは許されていた。しかし、ソ連兵から若い女性を要求されることしばしばであり、母はそれを庇ったり避難させたり、苦勞が絶えなかった。また、司令官の部屋といえども女性一人では入らぬよう注意するなど、気の抜けない日々だったようである。

昭和二十一年になって、日は定かではないがソ連軍と八路軍の間でいざこざがあったらしい。二階に手榴

弾が投げ込まれ、玄関からも銃弾が撃ち込まれるような夜半の交戦で、火災になる事件があった。銃声を聞き、母はとっさに「布団をかぶれ」と身を伏せさせた。

その後危険が迫り、S氏の誘導で地下室に避難した。幸い、母をはじめ甥の嫁と二人の子供、従業員全員無事隣家に避難した。その陰には、ボイラー担当の偉丈夫で力自慢のS氏の奮闘があった。彼は弾丸の飛び交うなか、危険をも顧みず皆を地下室へ誘導し、一時身を潜めたあと裏庭に出て、塀の上から一人ひとりを引き上げてくれた。お陰で全員助かった。さもなければ犠牲者が出ていたとのことだった。父は当日健康を害して入院していたので、難を免れたという。

昭和二十一年三月ソ連軍が撤退した後、八路軍が進駐。やがて国府軍の攻勢が始まり、国共両軍の間に四平をめぐる争奪戦が展開されたという。四平は両軍にとっての重要戦略拠点であり、日本人引揚後も含め四次にわたる戦闘があった場所である。八路軍は当時十七歳以上、五十歳以下の男子を前線の散兵壕掘りに狩り出し、一方、居留民会を通じて女子を従軍看護婦と

して徴用するよう命じた。居留民会がノルマを各班に割り当てたので、我が家でも女子従業員をクジ引きで決めることになった。そのとき、T子さんが「私が行く」と志願して八路軍に従軍した。母は「お姉さんに相談して決めたらどうか？」と念を押したが、決心を変えなかったという。戦後T子さんに「あの状況の中で勇気がありましたね」と聞くと、「正直不安だった。しかしクジで決めるのは酷だったので……」と。同僚を思う心が犠牲心をかき立てたのだろうか。二十歳そこそこの女性で、よく決意したと感心する。他の班では候補者選びに難渋していた。年ごろの娘を持つ親、徴用条件に該当する女性、応召者の妻など、生きた気がしなかったらしい。

T子さんの従軍期間は三カ月の約束だったが、その後満州各地をはじめ中国本土の戦線を転々として八年近く勤務し、同じ病院で働いていた日本人男性と結婚。長男の誕生にも恵まれて、昭和二十八年天津から葫蘆島を経て無事舞鶴に引き揚げる事ができた。天草で再会したご両親の喜びは、想像を越えたことはいま

でもない。

話は戻るが、昭和二十一年七月から四平在留日本人の引揚げが始まった。中旬ごろ両親は親類、従業員と共に約二十五時間かけて、無蓋車で苦難の旅を続け胡盧島へ。そこから引揚船で舞鶴へ上陸して、横浜（日吉）まで苦労を重ねた約二十五日の旅だったという。

このように、戦後の苦労が父の死を早めたのか。母の悔し涙はいつまでも続くのだった。

この日吉の家は、昭和十九年完成後、父が甥に住ませ管理させていた。空襲が激しくなり甥一家は疎開。当時、空き家にするには許されなかったので知人に貸したのが、戦後問題を残す原因になった。そのときの事情としてはやむを得なかったことではあるが、両親が帰国しても明け渡ししてもらえず、奥の四畳半一室で間借人のように暮らしていた。終戦後は、貸し主より借り手の権利が強く保護されていた時代であり、やがて父の甥がシベリアから復員して来たので、その家族入居のために立ち退きを要請したが、応じてもらえなかった。母屋を他人に占有されての三家族同居生活

が長年続き、苦勞した。

父亡き後、母は駅の近くで露天商をして生活していた。これでは学業を続けることは無理だと諦めた。しかし、生前父が学業を継続させる意思が強かったことを母に云われ、思い直す。

昭和二十二年三月、旧制第一高等学校の転入試験を受けたが失敗。そのほか転入させてくれる学校もなく、思案に暮れていた。そのころ小学校、中学校、高等学校を同じくし、大連で委託販売を共にしたT君が上京して、我が家で過ごすことになった。二人で無為に過ごすこともできず、アルバイトを探したが見つからない。近所のある学生が「きつい仕事で良ければ紹介する。朝五時に県庁横で某氏を尋ねなさい」と、横浜港の日雇い労働者の手配師に引き合わせてくれた。そこには既に職を求める大勢の労働者が屯していて、異様な雰囲気であった。手配師はその日の仕事量に見合った人員を調達して、港湾事業者に引渡す権限を持っていた。彼に指名されなければ仕事にあぶれてしまうので、労働者は真剣な眼差しで手配師を見つめている。

どんな基準で決めるのか分からず、ひたすら待つのである。

とにかく、その学生のお陰で、その日の日雇い港湾労働者に選ばれた。仕事は外国船の船腹に付いている錆落とし（「かんかん虫落とし」と言われる）らしい。舢乗に乗って米国貨物船に向かう。仕事の指示待ちのとき、大人の労働者に混じって十四歳ぐらいの少年が一人いるのが気がついた。やがて一人の船員が、私とT君を手招きして船室へ導いた。従って、他の人が何をしていたのか分からないままだった。船室にペンキの缶と刷毛が用意されていて、「この部屋のペンキ塗りをしろ」と命じられた。もちろんペンキ塗りは生まれて初めてだが、「かんかん虫」の仕事よりましだと思ひ、懸命にやった。悲しいかな、未経験なので苦労した。仕事途中で船員がコーヒをいれてくれた。当時あくせく働いていた日本では珍しい、コーヒブレイクを与えてくれたのだ。長い間口にしていなかったのも、その香りと味の余韻を充分に楽しんだ。

ところで、例の少年は吉川英治著「かんかん虫は唄

う」に出てくる「トム公」のように機敏で賢く、度胸があった。仕事の合間に廊下トンビして、船員から外国たばこやチョコレートを手際よく仕入れている様は手慣れている、とても少年には見えない。日当よりは稼ぎになったであろう。だれも文句は言わないようだった。手配師の大将も味方になっている戦災孤児か、病身の親を抱えている現代版「トム公」だったのかと想像したくなる。

それにひきかえ我々二人は、オロオロと慣れぬ作業で服と帽子をペンキだらけにして働いた後、舢で夕闇迫る港へ戻った。初めての労働で得た弁当と貴重な日当を手にして、家路についた。その後、日雇いは一〇〇円二個と四〇円の「にこよん」と呼ばれ、定額日当二四〇円になったが、当時我々が受け取った日当はそれにも満たなかった。しかし、初めて働いて手にした賃金であり、嬉しくて母に渡したら、仏壇に恭しく供えていた。

昭和二十二年九月、旧制第四高等学校が転入試験をする情報を得た。今の生活状態で金沢行きは無理と思

っていたが、母は承知してくれた。幸いに二年二学期から転入学できたが、母に大きな負担をかけたに違いない。しかし、その後も苦しいはずだが一言も愚痴はなく、心苦しかった。

金沢出身者で四平に単身赴任していた方から、「お父さんに大変お世話になった。辛しくないがここから通ったらどうか？」と好意あるお申し出をいただき、七尾線横山から汽車通学することになった。食糧難のときであり、ご迷惑をかけたが有り難かった。思いもかけぬ救いの手に出会い、父があの世界から見守っているように感じながら、ご好意にすぎることにした。

その後大学を卒業し、就職してあらゆる経験をしながら人並みの生活をしてきた。考えてみれば、死と隣り合わせの経験をしながら今日まで生き長らえてきた。その陰には、人生のあらゆる場面で多くの良き方々に出会い、教えられ、助けられてきたからであって、感謝の気持ちでいっぱいである。

それにしても、戦後の苦難に堪えて生活し私を支えてくれた母に、報いることも幸せにすることもないま

ま、昭和三十三年三月三十一日に野辺送りしたことに一抹の悔いが残る。

あとがき

四十年余りを満州で働き続け、敗戦によってすべて

の財産を擲なげうつて帰国した父が、生活を再建できずに

病死したことは、本人にとつて無念であったに違いない。そして、その父に再会すら果たせず、長年の苦勞にも報いることなく現在に至ったことは残念である。

平成元（一九八九）年と平成十六年の二回、妻を伴い小学校同窓会有志と四平を訪問した。二度目のときには都市再開発計画が進行中で、駅をはじめ我が家は取り壊されていた。しかし、四平戦役記念館に、司令部跡として我が家（植半旅館）の写真が展示されていた。それに対面して、両親の苦勞を偲ぶことができたことが、せめてもの慰めであった。

また、毎年八月が巡りくるたびに思いを新たにするのは、学業半ばでソ連軍の凶弾に撃たれ戦死し、あるいは戦病死した級友たちのことである。それも、昭和

二十年八月九日、ソ連軍が突然侵攻してからわずか一週間で足らずの間の戦死であり、本人たちの無念さを思うと胸が痛くなる。この級友たちの御霊安かれと、心から祈りつつ筆を擱く。

学なれば戦場に果てし友ありき

われ生き生きて北斗仰ぐも